When Your Lover Has Gone
恋去りしとき
Eddie Higgins Quartet
エディ・ヒギンズ・カルテット

1.レッド・ドア
The Red Door《Z. Sims & G. Mulligan》(4:37)

2.イン・ユア・オウン・スイート・ウェイ
In Your Own Sweet Way《D. Brubeck》(6:32)

3.ズート・ヒムズ
Zoot's Hymns《E. Higgins》(6:10)

4.ガブリエラ
Gabriela《A. C. Jobim》(5:18)

5.カム・レイン・オア・カム・シャイン
Come Rain Or Come Shine《H. Arlen & J. Mercer》(7:04)

6.ワルツ・フォー・アリソン
Waltz For Allison《E. Higgins》(5:48)

7.イメージ
Image《L. Eca》(4:34)

8.ハイ・フライ
Hi Fly《R. Weston》(6:22)

9.ティズ・オータム
'Tis Autumn《H. Nemo》(5:06)

10.レッド・ブラウス
The Red Blouse《A. C. Jobim》(6:08)

11.恋去りしとき
When Your Lover Has Gone《Swan》(4:28)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins - piano
ジョン・ドーテン John Doughten - tenor saxophone
フィル・フラニガン Phil Flannigan - bass
ダニー・バーガー Danny Burger - drums

録音：1994年2月3、4日　ニュー・リバー・スタジオ、フロリダ

Ⓟ Ⓒ 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Reissue Producer:Tetsuo Hara.
Produced by Eddie Higgins & Francois Zalacain.
Recorded February 3&4,1994 at New River Studios, Fort Lauderdale, Florida.
Engineereed by A.T. Michael MacDonald .
Remastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura & Tetsuo Hara .
Front Cover :© Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo.Designed by Taz.

心地よい美しさをもつピアノ・タッチを聴かせて、いつも聴き手を最高の気分にさせてくれるエディ・ヒギンズは、スイング～モダン・スタイルにあっては、現代最高の実力をもつベテラン・ピアニストといって良いだろう。比類ないメロディック・センスと、ロマンをかき立てずにはおかない優雅なフレージング。けっして派手ではないけれども、ほんとうの意味での音楽を聴く喜び、良い演奏にひたることができたときの心の充実といったものを感じさせてくれるのが、エディ・ヒギンズの演奏である。このアルバムは1994年、そんなヒギンズによってサニーサイドというマイナー・レーベルに録音された、彼の隠れた名盤の一枚。かつて輸入盤でわが国に入ってきたことはあるものの、今回が国内盤としては初のリリースということになる。そのオリジナル・タイトルが「Zoot's Hymns」となっていたことからもわかるように、このアルバムには白人のテナー・サックス奏者、ズート・シムズに寄せるヒギンズの想いが強く込められている。1985年に世を去ってしまったズート・シムズは、年令的にはヒギンズより7才年上で、ジャズの世界ではヒギンズの先輩に当たる。1940年代の後半から、ウディ・ハーマンの“セカンド・ハード”と呼ばれたオーケストラで名を知られるようになり、スタン・ケントン楽団やジェリー・マリガンのバンドなどで活躍。レスター・ヤングの影響をうけた、スムーズなメロディー・ラインを特色とする良く歌うアドリブ・プレイを繰りひろげて、スタン・ゲッツと並ぶ最高の白人テナー・プレイヤーとしての名声をほしいままにしてきた。洗練された音楽センスとともに、いつも聴き手の心を満たしてくれる安定したプレイをおこなってみせるのも、ズート・シムズの演奏の大きな美点になっていた。そういったズートがもっている音楽的な特質は、まさにエディ・ヒギンズにも相通じるものがある。“ズート・シムズと初めて会ったのは1979年、セントルイスでのことだった”と、エディ・ヒギンズがその時のことを振り返る。“50才になった友人のパーティーの席で、お気に入りのミュージシャンたちも呼んだんだよ。ズート・シムズやジョニー・ハートマン、クラーク・テリー、ビル・ワトラスなんかがいたっけ。ズートは僕の大好きなプレイヤー。彼のサウンドはクールで官能的、そしてとても高貴なスピリットをもっている。もし僕がテナー・プレイヤーだったら、こんな風に吹いてみたいと思うプレイを、彼は演ってくれるんだ・・・”

そんなズートに想いをはせて、エディ・ヒギンズが書いたオリジナルが、＜ズート・ヒムズ＞というわけである。ヒムズ（Hymns）とシムズ（Sims）を引っ掛けたタイトルも洒落ているが、“Hymn”とは“賛歌”という意味で、この曲は文字どおり、ヒギンズによるズート・シムズへのトリビュートといった性格をもつものになっている。ここではゲストとして参加したジョン・ドーテンが、まさに雰囲気たっぷりのソロを吹いてみせる。いかにも日本人好みのマイナー・キーをもつ、哀愁味あふれるテーマを吹くジョン・ドーテン。彼のスムーズなキー・ワークと、イマジネイションの飛翔を感じさせるヒギンズの珠玉のピアノ・タッチがぴたりと融合をみせた、素晴らしいトラックになっている。“ジョンはコンピューター関係の仕事をしている男で、テナー・サックスは余技なんだ。でもプロのミュージシャン以上のプレイをするんだよね。彼とは僕が毎年出演していたジャズ・フェスティバルで出会ったんだ。ジョンはひとりの旅行者として、そこに来ていたけど、そのときはサックスを持っていた。彼は参加してもいいかって言ってきたんだが、プレイを聴いたときは驚いたね。まるでスタン・ゲッツかズート・シムズが生まれ変わったのかと思ったよ・・・”ズートへのメモリアル・アルバムを吹き込むに当たって、ヒギンズがジョン・ドーテンに声をかけたのは、当然のことのようにも思える。ジョンはテナーのほかにクラリネットやバリトン・サックスも吹くというが、本セッションがきっかけになって、2年後の96年には「A Time for Love」を、やはりサニーサイド・レーベルへ録音することになる。そこでは逆にヒギンズがサイドマンとして加わって美しいサポートを聴かせてくれているのが、とても印象的だった。＜ズート・ヒムズ＞を含めて、ジョン・ドーテンが参加しているカルテットの演奏は、全部で6曲。＜レッド・ドア＞は、ズート・シムズとジェリー・マリガンのペンになるもので、ズートによる1952年のオリジナル演奏は、プレスティッジ盤「ザ・ブラザーズ」の中に含まれていた。ハロルド・アーレンによって1946年のミュージカル“セントルイス・ウーマン”のために書かれた＜カム・レイン・オア・カム・シャイン＞は、ヒギンズにとって、特にズートを偲ぶために思い出深い一曲だという。“1983年の秋の夜のことだ。セッションが終わって、ラウンジには10人程度の客しかいなかった。ズートはギターのバッキー・ピザレリと一緒に＜カム・レイン・・・＞をデュエットで演奏したんだが、それは本当に純粋で美しく、魂が宿っていた。僕の頬には、思わず涙が伝って、流れていったんだ。あのときの気持ちは、決して忘れることができないだろうね・・・”　同じくスタンダードになっている＜恋去りし時＞は、何か一曲をというヒギンズのリクエストに応えて、ジョン・ドーテンが選んだもの。スイングするリズムに良く乗って、軽快なドライヴを聴かせるドーテンのテナーが、じつによい雰囲気を描き出している。ヘンリー・ネモが書いた＜ティズ・オータム＞は、スタン・ゲッツの名演で知られるバラードで、やはりドーテンのようなプレイヤーにはぴったりの一曲である。＜イメージ＞はブラジル人ピアニストで、作編曲の才能もあるルイス・エサの作品。ヒギンズは初めてエサの音楽を目の当たりにしたときのことを、こう語っている。“ルイス・エサは1968年に、“タンバ4”のリーダーとして、シカゴの“ロンドン・ハウス”へやってきたんだ。それは信じられないようなバンドだったよ。まるでオスカー・ピーターソンのようなプレイと、ハイ・ローズがやっていたような高度なハーモニー・コーラスを、同時に聴かせるんだからね・・・”ここでは躍動的なボッサ・ビートに乗って、ドーテンのテナーとヒギンズのピアノが、ぴったりと息の合った絶妙の絡みを繰りひろげてみせている。いっぽうピアノ・トリオによる演奏は5曲。＜イン・ユア・オウン・スイート・ウェイ＞は白人の人気ピアニスト、デイヴ・ブルーベックによって56年に作られたもので、マイルス・デイビスなどを筆頭に、多くのミュージシャンが好んでとりあげて演奏していた。ブルーベックのオリジナルの中でも、広く知られている一曲といって良いだろう。原曲のもつスマートかつ幻想的なムードと、ヒギンズのロマンティックなピアノ・タッチが、絶妙のブレンドをみせた演奏になっている。ジャズメンによるオリジナルでは、やはりピアニストのランディ・ウェストンによる58年の作品＜ハイ・フライ＞がある。もともとはリズミックなアクセントが強調されている面白いナンバーだが、ここでのプレイはあくまでヒギンズ流で、エレガントさを失うことなく、優雅にメロディーをスイングさせてゆく。＜ワルツ・フォー・アリソン＞は、ジャズ好きの友人の可愛い娘のためにヒギンズが作ったオリジナルで、彼の優しさがそのまま表れたような、リリカルな作品になっている。このアルバムでは、ボサ・ノヴァの創始者のひとりとしても知られるブラジルの有名な作曲家、アントニオ・カルロス・ジョビンの美しいナンバーも、とりあげられている。“ボサ・ノヴァは、永遠の価値をもっている音楽だと思う。アントニオ・カルロス・ジョビンは20世紀の比類ないコンポーザー。彼の書くメロディーは、どれも宝石のように輝くものばかりだね。僕がブラジル音楽に魅了されたのは、1963年頃のこと。いろんなレパートリーを探していたときに、ジョアン・ジルベルトやアントニオ・カルロス・ジョビンのレコードに出会ったんだ。そのレコードは、いままで知らなかった素晴らしい曲の宝庫だった。それから今日まで、彼らの音楽には惹かれっぱなしで、今もレパートリーに加えているんだ・・・”とヒギンズ自身が語っているように、今日のヒギンズのレパートリーにジョビンのナンバーは欠かすことができない。このアルバムと同時に発売になる「恋のためいき」でも、ヒギンズは＜ポール・トーダ・ア・ミーニャ・ヴィーダ＞をとりあげていたし、96年のアルバム・タイトルになっていた「黒と白の肖像」もジョビンの作品だった。さらにヒギンズは98年には、ジョビンのナンバーばかりを演奏したアルバム「愛の語らい」も、サニーサイドへ録音しているのである。洗練された響きをもつジョビンのメロディーは、ヒギンズのピアニスティックなセンスにぴったりの素材であることは、本アルバムの演奏からもよくお解かりいただけることと思う。

岡崎　正通（http://www.bestjazz.jp）